

平成 30 年度第 4 回 長野市総合計画審議会 会議録

日 時：平成 31 年 2 月 20 日（水） 午後 3 時から午後 5 時まで

場 所：第一・第二委員会室（第一庁舎 7 階）

出席者：委 員/ 青柳委員、荒井委員、池尻委員、市村委員、伊藤委員、大日方委員、
金物委員、萱津委員、熊井委員、黒岩委員、小木曾委員、寺田委員、
轟委員、廣田委員、藤原委員、梅干野委員、牧野委員、宮沢委員

長野市/ 倉石総務部長、西島企画政策部長、清水財政部長、増田地域・市民生活部長、竹内保健福祉部長、北原こども未来部長、井上環境部長（代理：倉島次長）、高橋商工観光部長、倉島文化スポーツ振興部長、横地農林部長、金井建設部長（代理：小林次長兼維持課長）、羽片都市整備部長、上杉会計局長、松本教育次長（行政）、永井教育次長（教育）、戸谷上下水道局長、根岸消防局長、島田危機管理防災監

事務局/（企画課）日台課長、佐久間補佐、宮坂係長、山口主査、白澤主査、
小林主査、小林主事

（人口増推進課）長谷部課長、関谷補佐、永岩主査、飛澤主査

1 開会

（事務局）

定刻のお時間となりました。ただいまから平成 30 年度第 4 回長野市総合計画審議会を開会いたします。本日の進行を務めます、人口増推進課の関谷と申します。よろしくお願ひいたします。

本日の資料は、事前にお送りしました、次第、資料 1 次期「長野市まち・ひと・しごと創生総合戦略」のあり方について、資料 2 長野市の人口動向について、参考資料 1 「カムバック to ながの」チラシ、参考資料 2 人口流出防止策・人口流入促進策に係る事業一覧（長野市まち・ひと・しごと創生総合戦略 付属資料 平成 30 年度アクションプラン（目標 1 及び目標 2 部分））でございます。併せて、机上には、荒井委員提出の A 4 資料、伊藤委員提出の A 4 資料、熊井委員提出の A 3 資料、左上タイトルに「総合計画前期基本計画の進捗状況（抜粋）」と記載のある A 3 資料を配付しました。ご確認の上、不足等ございましたら事務局までお知らせください。

また、本日は清水委員、山崎委員からご欠席のご連絡をいただいておりますので、ご報告いたします。

それでは、次第に基づき進行いたします。

まずはじめに、金物会長からご挨拶をお願いいたします。

2 会長あいさつ

(金物会長)

本日の審議会は、本年度としては4回目、現委員の皆さんとしては2回目の開催となります。

昨年11月に開催された、我々としては第1回の審議会では、第五次長野市総合計画、並びに長野市まち・ひと・しごと創生総合戦略の両計画に係る概要説明が事務局からありました。

議事(1)では、次期「長野市まち・ひと・しごと創生総合戦略」のあり方について、今後の方針案をご審議いただきたいと思います。

また、議事(2)では、今後、長野市としてどのような人口減少対策が必要かということについて、委員の皆さんに前もってご意見をいただきたいということで伝えてあって、今日も幾つかの資料を出していただいた、ということで皆さんもちょっと考えてみたかもしれませんけれども、それについてご意見を頂戴したいと思います。

ぜひ、忌憚のないご意見をいただき、実りある会にしていきたいと思いますので、皆さん、ご協力の程よろしくお願いいたします。

3 議事

(事務局)

ありがとうございました。

それでは次第の3に移ります。

議事ということですが、議長につきましては、規定により金物会長にお願いさせていただきたいと思います。

審議時間ですが、事務局といたしましては午後5時を目途にお願いしたいと思います。

それでは金物会長、よろしくお願いいたします。

(金物会長)

それでは議事に入りたいと思います。まず、次期「長野市まち・ひと・しごと創生総合戦略」のあり方について事務局の方からご説明をお願いします。

(事務局)

人口増推進課長の長谷部です。よろしく申し上げます。私から、次期「長野市まち・ひと・しごと創生総合戦略」のあり方について、ご説明させていただきます。

— 資料1「次期「長野市まち・ひと・しごと創生総合戦略」のあり方について」に基づき説明 —

私からの説明は以上です。

(金物会長)

はい、ただいま事務局から説明がございましたけれども、まとめますと平成31年度末までの5年間の計画として策定された「長野市まち・ひと・しごと創生総合戦略」は、第五次長野市総合計画前期基本計画に包含されているということで、役割の整理とか、働き方改革の観点からも業務の効率化が必要であるということから、2022年4月開始の総合計画後期基本計画に統合して、現在の現行5年間のその後2年間を後期基本計画に合わせるように総合戦略を延長するという方針です。これに関してご意見、ご発言がありましたらよろしくお願ひいたします。

ご意見がないようでしたら今、事務局から提案があったように、「長野市まち・ひと・しごと創生総合戦略」現行の5年が2020年4月で終わるところ、あと2年間、延長して第五次長野市総合計画後期基本計画に統合するという形で、特に反対意見ないようですのでそういうふうに進めさせていただきたいと思ひます。

それでは、了承いただいたということで、続きまして議事の2番目です。本市が取り組むべき具体的な人口減少対策（人口流出防止策・人口流入促進策）に係る意見交換ということで、これについて事務局の方からまず説明いただいて、それから委員の皆さんのご意見を伺いたいと思ひます。

事務局の方からお願いします。

(事務局)

人口増推進課長の長谷部です。引き続きお願ひいたします。

皆様からご意見をちょうだいするに当たりまして、その前段として長野市の人口動向について改めて現状認識の確認ということをごさせていだきたいと思ひます。

— 資料2「長野市の人口動向について」に基づき説明 —

以上、本市の人口動向について推計を含め概要を見てまいりました。

最新の平成31年1月1日現在の本市の人口は377,967人であり、長野市人口ビジョンの推計より若干上回ってはいるものの、本市が目指す将来の姿としている2060年の

人口 30 万人の確保は難しい状況です。このような中、今後更に進展する少子高齢化及び人口減少を克服し、将来世代に活力ある地域社会を引き継ぐためには、社会増に資する施策と自然増に資する施策の両面から推進していくことが必要ではありますが、そのうち、今回に関しましては、人口流出に歯止めをかけるとともに人口流入を促進するための社会増に資する施策を中心に、各委員の皆様から専門的な知見に基づき具体的なご提案やご意見をお願いいたします。

私からの説明は以上です。

(金物会長)

ありがとうございました。

ただいま事務局の方からご説明がございましたように、人口減少ということに関して、何か対策はないかということで、前もって皆さんに案内しましたように、1人3分程度でお願いします。

(青柳委員)

長野市にとってこの問題がかなり重要な問題であるということでありまして、これは長野市ばかりでなくて、どの地方、市町村をとってみても一番大きな課題であることは間違いないと思います。

結論から申し上げますすみません、特効薬のような策はございません。長野市が今現在、実行している、いろんなこの件に関する施策に関しては、かなり多く取り組んでいただいておりますし、多分、その現行の施策を地道に長く繰り返していくことしか手がないのではないかなというふうに私は考えています。

このいただいた資料2の4ページにもありますとおり、進学ということで首都圏の学校へ出て行って、その数がそのまま100%長野へまたUターンということで戻って就業してくればこれは何も問題はないわけですけども、卒業生の8割が県外へ出てくそうですね。その出て行った8割のうち、3割強が長野に戻って就業するというので、全体的には20数%しか長野に残らないということになるわけですけども。これをどう変えていくかということがやはり一番大きな課題ではないかなと思うんですね。長野にその魅力のある仕事がないということが一番、大きな原因であるというようなことは言われておりますけども。

ただ、長野にある企業の内容を学生に十分に伝えきれているのかということこれも充分ではない。このことに関しても長野市はいろんな意味でおしごとながの等を通じて広報したりいろんな活動しておりますので、そのうち何らかの形で良い結果が出てくるのではないかなと思いますけども、いずれにしてもこちらへ戻ってくる一番大きな理由というのが、自分の希望する仕事、あるいは良い会社と思うところになかなか仕事が無いのではないかなというようなことが一番大きな理由だというふうに聞いています。地道な活動ですけれども、現行の活動を重ねていくことではないかなと思います。それと進学者に関しても県

立大学が出来上がりましたので、その部分の効果も全体比率とすればまだまだでありますけども、確実に効果が出てくるように期待をしております。

(荒井委員)

本日お配りした資料両面のものがありますね、そちらをご参照いただけたらと思っております。私の見解ということですがけれども1つ前提認識の共有ということで、幾つか挙げさせていただきましたけれども、専門が教育分野ということもありまして、今後、人口のシミュレーションをしますと、およそ全国のデータでありますが小学校の1クラス当たりの人数が11人ぐらいになります。中学校レベルでも13人ぐらいになりますので、そもそも学校など教育機関のあり方というようなものを見直さなくてはいけないというのはどの自治体も深刻化している課題であります。そのことを前提としまして、コメントのところに移らせていただきますけれども、1つ目はですね、長野市の人口動態の推移のデータがありましたけれども、そもそもこの5年間を比べてもそれ相当の増減がありますので、何故こういう結果になっているのかということの分析が必要ではないかなというふうなことを感じました。

2点目はですね「人口流出防止」あるいは「流入促進策のメッセージ性」というふうなことを書かせていただきましたが。事前に配布していただいた、「カムバック to ながの」というふうな資料に関して、あるいは続いて2ページ目に行きますけれども、別途参考資料2という形で資料をお配りいただきましたけれども。少しメッセージ性というものに乏しい感じがしまして、先ほどの県内企業の情報というふうなことで青柳委員からもありましたけれども、対象者に届いていない可能性があり得るかもしれないというふうなことです。

3点目はシンプルでして「他自治体の事例検討も必要だ」というふうなことを書いておきました。

4点目は基本的に一般論でありますけれども、先ほどの地道な努力を継続するというのは当然であります。基本的に人間っていうのは恐らく、こちらに現状を把握した上で様々な選択肢の中から今の生活を変えてでも転出するに値するかの判断をするというふうなことだと思います。ですので、少なくともこの長野市に現在住んでいる方々に対して、とりわけ、進学・出産等々の変動が起こり得る世代に対しては、かなり中長期的にどういう要因で移動されているのかということ进行分析することが中長期的には必要ではないかなと思っております。

とりわけ、年齢別の人口移動のデータを見ますと、新卒あるいは子育て初期世代において転出が転入を上回る結果となっております。このことから、もしかしたらではありますけれども長野市は当初の時点では働きがいのある職につくことができてもそれが継続して働きにくいあるいは定着しにくい。さらには結婚や出産っていうふうなものもできたとしても、安心安全な子育て環境の整備や継続的な子育て支援策が講じられていないという認識が出

されてしまっている可能性があるというふうに感じました。こういった入職後に働き続けにくいとかですね。あるいは安心安全な子育てがしにくい、魅力ある休暇が展開されていないという評価が固定化するとかなりの痛手になるというふうに感じています。

従いまして、1つの提案ですけれども、思い切ってですね、この政策の優先順位というふうなものを再検討していただいて、まさに人口の流動の1つの核になってる学生生活あるいは家庭生活社会人生活のこのいわゆる人生前半や中盤の社会保障というふうなものを支援していくような施策にも優先順位を高めていくということが必要ではないかなというふうにいただいた資料から感じた結果でありますけれども、そのようなことをまとめさせていただきます。

(池尻委員)

私個人的に今、思春期から小学生の子供をちょうど育てている世代なんですけれども、先日、やはり信濃毎日新聞さんにも長野県というのはすごく東京の方に就学率が高いので、こちら(東京)の方で試験するメリットがすごく大学側にはあるという、そういうような資料が載っていました。なので、私も高校生の息子がいるんですけれども、やはり将来のことを考えたときに長野の学校、もちろん信大とかもあるんですけれども、やはり選択肢が少なすぎて、例えばその息子の将来を考えるとやはり長野市長野県ではないのかなというところが正直なところかなというふうに思います。やはり先ほどお2人からも出ていましたけれども、その後のことということを考えると、やはり長野市もちょっとこう企業が少なすぎてこうすごく発揮できる場所が少ないのかなというのは親目線から考えると感じるころではあります。私自身も知らないんですけれども、もっともっと長野市にはこんな企業があるとか、こんな活躍ができるということも伝えていってもいいのかなということを感じています。

あと、私は子育て支援に関する仕事もしているんですけれども、その方たちの話を聞くとやはり長野市は中核市がゆえにちょっと届きにくい。こう一般的な政策は充実している。でも、1人1人に向けた充実感がないような気がするんですよ。

これで保育園の発表もきっと認可保育園等も発表されていくと思うんですけれども、やはりそのお母さん方の思いというところと市の思いというのにズレがあるということと、あと私は正直、助産師という立場にもいるんですけれども、もっと市と民間が融合していけばいいのになというのを思うんですね。市には市しかできない政策があり支援がある、でも民間にできる支援もあって、そこをもっとなんて言うんですか。今切れ目のない支援ということは言われてはいるんですが、そこがされているかと言われると私は決してそうではないと思うので、やはり数値目標という形で出生率とかそういうところも出てくるんですけれども、それを考えるのであれば私はもっとそこを柔軟に考えていくべきではないかなというふうに考えています。

あと、これは中学生の息子とちょっと話していて、息子たちもこんなふうに感じるのか

など思ったところがありまして、今うちの息子、長野市立の中学校に通わせていただいているんですけど、息子の方から、もうこの教育は難しいと思うという話が出まして、何でと言ったら、やはり公立の学校、地域でくるといのはいろんな人が居すぎて難しいのではないかという意見が息子から出てきたんですね。私もたまたまちょっとPTAの方の役員もやらせてもらうこともあって学校に行くこともあったので、息子の言っていることがすごくそれが感じ取れたんですね。確かに教育とかの政策というのは国からも下りてきているものなので、長野市で独自にやるというのは難しいと思うんですが、私は先ほど小学校で11人、中学で13人になっていくという話があったんですけども、いろいろなことを考えると、もしかしたら今の現行の制度というところ、その教育制度というところ、ちょっと難しいところもあって、何かこう、また一方を考えていっても良い時なのかなというのをすごく感じています。

(伊藤委員)

3枚ものの資料がありますので、そちらを見ていただきたいんですけど、社会減を防止という課題なんですけども、基本的には絶対人口数を増やすというのがまず第1です。その社会減を減らすために予算を使うよりも、まず若年層に直接給付するのが最も効果的です。

人口が減っている最大の原因は、団塊の世代の子供たちは先ほどの表で見ますと1975年が一番人口があったんですけど、それらの今の40代から30代の人たちの婚姻率の低下というのが最大の原因です。彼らに対して、ロスジェネレーション世代とも言われてるんですけども、いわゆるその経済的な困難による婚姻率の低下というのを防止するのが最も効果的な手段です。ちょっと参考に挙げたんですけども、ロシアの少子化対策ということで、1990年代、ロシアというのはすごい経済的な困難で、いわゆる人口が1年に100万人も減るとい時代があったんです。広大な面積と国境を持っているのでロシアにとっての人口減少というのはすごく深刻な問題で、2006年から人口増進策を国家として取り組んだのです。実際にその効果というのが2015年以降に生まれました。実際こういうふうにするのであればできるんです。しかもロシアの場合は、お金がないんです。ロシアみたいな国は国債を外国に買ってもらっているのです。それで資金調達をして人口増進策をしているんです。日本の場合は、財政の問題ってよく言われるんですけど、お金よりも人がいなければ社会は成り立たないわけですね。しかも日本の場合は、国債というのは全部円建てで作ってありますから。しかもそれが、日本の金融機関が買っているんで、基本的に外国に対する借金というのはないはずなんです。ですから財政の心配はそんなに全体としては考える必要がないと思っております。

1枚目の課題なんですけども、社会減を減らすためにはまず都市化の推進というのが必要だと思います。ここに書かれてあるんですけども、町をやはり魅力的な町にするというのはどうしても必要だと思います。確かに長野市の東口の町を綺麗にするので事業年度に20

年、実際は 30 年から 40 年かかってすごい反対があるなかで長野市の方が努力してやっていただいたと思うんですけども、それと同じような都市化の推進、都市の再開発というのをすれば社会減が減ると思います。実際にそういう街というのはありまして、例えば仙台市ですとか、松江あたりですと、街の魅力があるということで、若者が集まっております。あと、北陸新幹線の高速化、東京・長野を 1 時間 10 分程度にするというのを国と J R 東日本に働きかけるというのが良いと思います。

次に、次世代産業の誘致です。ちょっと大袈裟なんですけども、いわゆるオーガナイズ組織っていうのを誘致すると、長野県は昔から東洋のスイスって言われたんですけども、スイスのようにいわゆる国際機関を持つ。いずれアジアに国際機関というのが欧米だけでなく、日本とか中国あたりに来ることがあると思います。それを先取りしても良いと思います。次にデータセンターの誘致、金融機関のバックアップセンターの誘致ですね。データセンターというのはいわゆるサーバーの塊なんですけども、非常に電力が食います。だから寒冷地が良いって言われていますが、北海道あたりでもデータセンターをつくっていますが、長野市も寒冷地ですので、富士通の長野工場という大きな工場がありました。そういったところを活用できないのかということですね。金融機関のバックアップセンターというのは、地震のないところに大体つくってあるんですが、これ伝統的に関東ですと、高崎市とか、群馬県あたりが地震がないということでバックアップセンターが多かったんですが、長野市も大きな災害がないので、そういった誘致は可能性があると思います。次に暗号通貨取引所等ブロックチェーン技術を適用したサイバー空間産業です。やはり新しい産業というのは、どうしてもやはり実物経済ももちろん大事ですが、サイバー空間というのはますます今後大きくなると思います。実際に若い人たちを見ても、皆さんもそうでしょうけど皆スマホを持ってパソコンで皆物を買ったり、LINE（ライン）で通話をしたりしてるんですね。こういった産業というのは持ってくる必要があると思います。あとは直江津港ですね、ちょっと隣の県は隣の県なんですけども、直江津港は非常に優秀な火力発電所を中部電力に作っていただいて、電力安定供給というのは長野市はできていますので、こういったものを活用する。あるいは環日本海経済圏、これも 30 年も 40 年も前から言われてるんですけども、そういった経済圏というのがいずれできますから、そうなった時に向けてのインフラ整備というのが良いということだと思います。

次に人と企業と研究機関の誘致ですね。ここでは信越化学工業と AOKI ということで、長野市をルーツに持っている会社の本社の誘致ということですね。次に、首都圏住民の別荘の保有促進ということで、二重生活を首都圏の方にやっていただくというのが一番ですね、向こうの方にとっても、経済的な基盤のリスクが下がりますので、長野は東京に近いですから、そういった意味でいくと二重生活というのを促進するというのがこれ有効な策になると思います。お金もそのかからないと思うんですね。

それとあともう一つ研究機関です。大学院大学というのがありますね、北陸と奈良ということで、奈良県みたいに長野県と同じように海のない県なんですけども、あとは金沢で

すね。金沢で北陸先端科学技術大学とそういった研究機関は誘致していますので、これを政府に働きかけて大学院大学とかそういった研究機関をこういう寒冷地に誘致するというのは有効な策だと思っております。

(大日方委員)

私は青柳委員さんのご意見とちょっと似ているんですけども、資料を拝見してやっている内容、挙げられてる内容というものに対してはすごいたくさんやられてるなという感じで網羅してるんじゃないかなというふうに思いました。でも、支援とか補助とか促進というふうに中身がちょっとよく見えなくて、自分の仕事をしている上での実体験とか聞いた話とかになってしまいうんですけれど、ホームページだけ作って募集してますとか、情報発信していますとか事業に運営を投げて促進しましたとか、あと補助枠が10件とか20件しかなくて、年度開始前に事業の問い合わせで、受付が締め切られてしまっていて、実際、その事業はその年度内に補助枠はなかったとか、例えばイルミネーションは電通に投げてしまって、あと丸の内とか表参道に遥か及ばない予算で実施6000万だけかけてやって、でもそれを東京の人に向けてわざわざ見に来てくださいとやってみたりとか、ちょっとズレてるなという部分も市民としてというか、1個1個の事業のやり方が多分悪いのでたくさんやっているんですけど、今の結果になっているのではないかなというふうに思っていて、子育てとかもしていて、保健所の情報とか知りたいなと思って、長野市のホームページを見たりするんですけど、家だとスマホしか私ちょっと見れないんですけど、市のホームページはスマホだと全然見れなくて、情報も全然わからなかったりとかするので、1個1個事業挙げているものは良いと思うので、全部のやり方の問題かなというふうに思いました。

(萱津委員)

まず、この資料をいただいたときに、自分としてえって思ったんですよね。ここには、長野市として人口減少、それで各委員様の専門的な意見。さて、自分に対して専門的な意見って一体何を話したらいいのか、そのあたりがすごく疑問に思って逆に私が聞きたいみたいな感じでしたけれども、今考えると皆さん若者若者といますが、若者よりもっと高齢者に対してネットで見てください、何を配信してますから、フェイスブックそれとかいろいろ機械音痴な方はたくさんいると思うんですよ。そういう末端な人に何1つ知られてないのではないかな。そういうところ、若い人が本当にスマホやいろいろなハイテクなものを使いこなせるんですが、それをこなせない人にネットでみてくださと言われて、じゃあどうやって見るのというようなところも、もうちょっと優しくネットばかりでなくて、何かで発信できるのではないかな。何でもそうなんですけどネットを見てください、何をみてくださいなんですかね、まず高齢者が元気にならないと若い人は育たないと思うんですよ。そこで、じゃあ自分たちが何ができると言ったら、自分たちがまず、底辺の中で自分た

ちが楽しいことをしたものの大きいものが輪になって若者も協力してくれるというような長野市にできたら、私は一番理想だと思うんですが。じゃあ、具体的にそれを挙げてどうしろということはまだ考えてなくて、今日皆さんの意見を聞きたいなと思ってます。

(熊井委員)

皆さん非常に素晴らしい総論を今、おっしゃっていただきました。私は各論をちょっと申し上げたいと思います。というのは人口の増加というのは、おそらくこれは私は感じるところに長野市の税金を確保したいがためですね。生産人口を増やすという、要するに税金を少し減らすのをやめて税金を確保するために人口増人口増とおっしゃっているんですね。そうゆうふうには解釈します。というのは、税金を確保して、すなわちその伏線には人口を増やすということです。同時にそうするにはどうしたら良いかということを考えるときに、最近長野市に住民登録をした私の知人がいます。その方がなぜ長野市を選んだのかということをお聞きしたわけですが、それを多分今日報告すれば、その中に多くのヒントがあると思います。彼はもうすでに子育てを終わって夫婦2人で東京で暮らしております。かなりの余裕のある暮らしでした。夏には山歩きを2人でしたり、冬はスキーをしに信州に何回か通ったということです。良く家庭の中で話すときにはもう自由なんだからどこに住んでも良いんだと。よく皆さんの住みたい場所はどこかという新聞を見ると第1位に福井県がありますよね、福井市。あるいは福岡県。長野はあまり高くない順位は。しかし、彼はなぜ長野を選んだのかというと、やっぱり長野は何回か訪問してるわけです。訪問した彼が選んだのは長野市が非常に便利だということです。というのは、先ほど、お手元にお配りした地図を見ていただくとわかると思いますけれども、長野市を中心にする、1時間ぐらいの1998年の長野オリンピックによってインフラの整備によって行われた綺麗な道路があるために、ほとんどの良い場所には1時間以内で行けるわけです。というのは、彼も写真を趣味にしておりますから、今日は白馬で写真を撮ろう、そして長野に戻り、ホテルで泊まって、明日は志賀高原に行こう。非常にレジャーな基地としては長野市は非常に有効な地理的なメリットを持っているわけです。一種の自転車言えば、スポークのハブですね、エアポートでも便利な場所はハブ空港といいます。長野市はまさにそのハブ空港だったというんですね。そしていろいろと聞いてみたら、実際に住んでみたら、まだまだ良いことがいっぱいあったというんです。ショッピングセンターが非常に多い。特に彼の住んでいるところには大型のショッピングセンターが3つあって、これが価格競争して非常に良い品物を安く買える、これ東京にはないことです。もう1つには24時間営業のスーパーがある。しかも徒歩圏内にある。このような利点が住んでみてわかったということです。一番の問題はやはり奥さんの問題ですね。女性は非常に即決しなかった。まだまだ東京にいます。多分、間もなく合意すると思いますけれども、そのように家族の分散型の社会というのは、今現状高齢の社会では多くなっているという事実をこのときに感じました。分散と言っても新幹線がありますから、1時間半ぐらいで行き来できるわけで

す。奥さんも事実月2回ぐらいは来ているようです。逆に、今まで通っていた年に1回の人間ドックは東京ですから、東京からわざわざこちらの病院を探すことなく行き来できるわけです。交通網の整備というものがある以上、長野というのは非常に効率のいい地方都市、しかも便利の良い地方都市であると彼は言ってました。これは非常にちょっと税収ということを書きますと、彼は所得税を払う立場ですから長野市には貢献できると思います。

あともう1つ、彼がちょっと言ったことに災害対策の拠点としてのバックアップ、多拠点の居住体制はこれからの高齢者の余裕のある方にとっては、大きなチャンスがあるんじゃないかと思うんです。

今、長野市のいろいろカムバック to ながのとかIターンとかUターンとか、Nターンとかおっしゃっていますけれども、これはちょっと違った意味でのターンですね、強いて言えば行ったり来たりしますからWターンでしょうかね。このような潜在的な需要がこれからあるのではないかと思います。特にこういう高齢者は増えていきます。どんどんこのような不動産価格が下がっている現状は非常に彼らにとっても居住しやすい環境になっていると思います。

以上、各論ですけれども今後の人口増加の施策に役立てていただけたらと思っております。

(黒岩委員)

人口のことで今自分で一番ショックを受けているのが、うち息子2人いるんですけど、上の子は今東京におりまして、下の子がこの4月から就職で長野県の企業も合格しました。喜んでいましたら、全国的な企業が合格してそっちへどうしても行きたい。という決断を下しました。どうしても子どもからすると、やはり1回チャレンジしてみたいとか1回行ってみたいとかそういうのがあるので、それを止めることできなかつたですね。それが1番その人口増の根本ですよ、家庭のなかで。間違いなくわずか10年ぐらいのうちに2人人口が減っているということなので、そういうのでちょっと今精神的にはそういうことを考えています。今日の発言の中でいきますと、私の立ち位置からすると難しいことはちょっと筋が違うので、イベント的な話を1つ提案として、例えばカムバック to ながのというチラシがありますけれど、少し前にラジオかなんかで車に乗っている時にちょっと聞きかじって良くどこのことかも覚えてないんですが、2度目の成人式をやったところがあって、それがやはり40歳ぐらいって親が具合悪くなったりとか、子どもが今度小学校に入りそうだとか、いろいろな人生の転機があって、うちの方でも厄年となると、やはり転機であつて、そういうところへそこの市だか町だか忘れましたが、それは2度目の成人式というのを執り行って、その式の中に地元のいろいろな企業さんがブースとして出展していただいて、そこで来た皆さんに今度うちの企業で働きませんかという昔で言うUターンですよ、そういうのも提案したりして、またそのあと飲み会みたいなものをやったら、地元で働いているみんなが帰って来いよという話があつたということをやっていました。そのイベン

トの1つとして、そういうのも面白いかなと思います。

うちの地元で花火とかもやっているんですけど、還暦の花火っていうのもやるんです。それをすごいみんな集まってきました。やはり去年私達の年でやったんですが、その時に帰りたいと嫁に行った人が家に住めないのを直してくれる事業者を教えると、それちょっとしたことなんですけれど。去年の私達がやった時と同じ40歳の厄年の人達も花火を上げていますが、その厄年花火の人達がそこで独身だった2人が行き会って結婚しました。今度いつその転換期に人生を考えますかっていう時のタイミングで何かいいアタックをしていくと、私自身もそうですが、自分の子どもにアタックしていくと、どこかで何かあるのかなというふうに思っています。そのようなちょっとしたイベントの話をさせていただきました。

(小木曾委員)

こちらの方、長野に住んでいただくためにはやはり雇用問題っていうのがすごく大きいと思います。それでまず雇用を創出するために、先ほど大きい企業に誘致していただいているものもあるかと思うんですけども、なかなかそういう機会もないかなと思っていて、やはり小さい、例えばその観光ですとか、それぞれのところで頑張っていただくためには、まず人に来ていただかなければいけない。ということで、先ほど熊井委員さんの方からもございましたけれども、各論的なお話で、先ほど黒岩委員さんの方からもございましたけれども、イベントをいろいろ作っていったらどうか。残念ながら、即効性はないと思いますし、これから30年、それでいけるかどうかというのもちょっとわかりません。ただ、やはりAIとかいろいろなICT農業とかいろいろあるなかでやはり新しいことをどんどんやっかないと駄目だと思うんです。恐らく東京もこれから世界の競争に負けていってしまう中で長野の立ち位置はどうなのかと言ったときに東京でもやっていないことをどんどん率先してやっかなければいけないと思うんです。

そういった中で1つ考えたのは、eスポーツです。eスポーツというのはエレクトロニカルスポーツの略でして、今すごくゲームが流行っていますけれども、お堅いところでこういう話をして良いのかちょっとわからないのですが、ゲームの人口はすごい伸びていて、かつ大会をしているのは実は、まだ日本では東京だけでしかも1回しか開かれていないんですね。ですので、こういったまだそんなに始まっていないところをはいと手を挙げたところが次の旨みがあるんです。ごめんなさい。商売的な話で申し訳ないのですが、旨みはもう10年経つともうなくなってしまうんです。だからやるなら今しかないんですけども、そのeスポーツを長野市さんでやっていただくと、これにはいろいろ問題があるんですけども、例えばeスポーツで問題になっているのはその高額賞金。今、日本ではちょっと出せない30万までしか景品法の関係で出せないっていうところを、例えばいろいろな工夫をすることによって出せたり、市が担保しているというところをいわゆるカジノ的なそういうのを無視してちゃんとやっている市がやっている堅いところですよっていう形で大

会なんかが開けるのではないかなと思っています。ゲームはやはりクールジャパンで日本、外国いろいろなところから人を呼び込む力があると思いますし、またそれから、箱物もうオリンピックレガシーがたくさんございます。ですから、もうやるしかないのではないかな、そんな感じでいろいろな年齢も問いません障害も問いません、なぜならばハリハリにゲームを使われている方なんかたくさんいらっしゃるんです。ですから、こういった新しいのを長野ではいと手を挙げるというのも1つの方法かなと思います。1つご提案ということでまた、ご検討いただければと思います。

(寺田委員)

私は社会福祉施設を運営している立場で自分の経験をお話したいと思います。常勤の職員が全部で380人ぐらいおりますので、毎年採用することが一大事業になっております。そういった中で去年の8月に採用したんですが、相談がありまして、新聞広告を出したいということでもあります。毎年、出しているんですが、今年は売り手市場ということもあるので、カラーの広告にしました。そうすると場所も良い場所を取ってくれるんですね、新聞社の方で。それから書いてある文面も見ましたが、今までどおりの伝統的なことしか書いていなかったの、誇大広告にならない範囲で良いところをPRするような文面に変えさせていただきました。

それからもう1つ、それまでは社会福祉士であるとか介護福祉士であるとかの資格を要求してたんです、応募するのに。それも、去年みんなで相談しまして資格は全部撤廃しました。運転免許だけに致しました。入ってから資格を取ってもらえば良いということにして新聞広告を出しましたら、その翌日ぐらいに長野市内に住んでいるおじいちゃんが「孫に受けさせたいから様子を教えてくれ」と言ってみて、聞かれて行った方がございました。それから全然、何の資格もなくて受けてきた方もいらっしゃいました。そしてどうなったかと言いますと、去年の場合、30人の方の応募がございまして、そのうち長野市外の方が10人、その10人のなかで県外の方が3人いたということですので、さきほどの、自然増減の傾向と似たような感じなんですけども、やっただけの何かの価値はあったのかなと思っています。そういったことから、それぞれの企業で、自分の良さを情報発信していくということがやはりもっとも大事ではないでしょうか。さっき言われた委員さんがいらっしゃいましたが、やはりネットに出てるから良いだろうというのはその次の段階なんです、ネットに行くまでに長野にいらっしゃるご家族の目に触れていただくというその努力が必要なんではないかというふうに感じました。

(轟委員)

私からお話させていただく前にちょっと映像の投影のご準備をいただきましたので、3分ほどの映像になります。まずこれご覧いただければと思います。

（轟委員）

これは5G（ファイブ・ジー）のこれから2020年本格化してきますけれども、その告知ということで総務省がつくったPRVTRということになりますけれども、これは、1個1個ご説明していくと長くなってしまいますので、主要なところだけご説明しますと、まず少年が乗っていた車はタクシーだったんですがドライバーがいません、自動運転です。それから高齢者のおじいちゃん、おばあちゃんが農家をしているんですけども、農薬をまくのはドローンでした。あと、おばあちゃんが化粧台を見ながら口を開けて医師の問診を受けている、これも遠隔でやっているものです。その他にも少年が商店で買い物をしていましたが始めこれ万引きじゃないかと思ったかもしれませんけれども、あれも電子決済ということで、今見ていただいたものは10年20年後なのと言ったら、決してそんなものではありません。恐らく2～3年後、ものによってはもう現時点でその情報その技術が使われているというものもあります。こんなようなことが普通に当たり前になってくる社会がもうすぐそこに迫っているという中で、では、長野市として何ができるのか、今回は少年が田舎の方に向かうという設定でしたけれども、田舎で生活をしながら、いわゆる都会的な生活を享受することができるという、居る場所が関係のない時代がやってくるというふうに私は考えています。そのような生活をするに当たってやはり今ご覧いただいたような環境が整っていなければ、なかなか居る場所に関係ないよというような生活ができないのかなというふうに思いますので、そんなような環境づくりというところにも注目をさせていただいて、選ばれる長野市というものを目指していただきたいと思いますというふうに思います。

（廣田委員）

私も中学生の息子が2人いるんですが、やはり、都会に憧れて出ていってしまうというような将来像というのは、どこかしらに見え隠れしている部分があります。なのでその部分はどうしても致し方ない部分だとは思いますが、逆に皆さんのご意見にもありましたが人生の転換期になった時に、長野に戻って自分自身の居場所づくりができるというようなイメージ像が持てるような子育ての期間を得られればその割合が増えていく可能性はあるのかなというふうに思っています。仕事上なんですけれども、事業一覧の方にもありましたけれども、若者の未来創造スペース運営支援事業というものがあまして、そちらの方でユースリーチというような事業で関わらせていただく中で、若者自身がこの地域の社会課題に触れながらそこに向けた解決策を考えていくというような事業を起こさせていただいております。今年50人の学生が関わっていただきまして、その学生自身が最後どんなことが成果だと思いますかというようなことでアンケートをとらせていただいたんですけども、一番多かったのが本当に多くの方たちと繋がったことだというふうに回

答をいただいています。というのがやはり人で繋がっているということは、将来自分自身が都会で培ってきた技術なりスキルを活かしていくフィールドとしてその自分自身が育った地域を選ぶということにはすごく大きな要因になるのかなというふうに思っていますので、やはりその若い今長野に居るうちに、より多くの方や地域と関わって自分自身がこれから培っていくものをどう生かしていくのかというようなイメージをすでに持って人生を歩んでいけるような、何ていうか元々つくっていくことが重要じゃないかなというふうに思っています。

あと、Iターン者の方の意見もよく仕事上触れることが多いんですが、やはりこの流れの中にとると、気づかないような視点というのにはすごく多いです。ですのでそういった形を協力者として是非募っていただいて、そういった形の視点からの魅力を発信していくということが、逆に都会に出てしまった子たちにも響くんじゃないかなというふうに思っていますので、参考にしていただければと思います。

(藤原委員)

私自身いろいろな大学生とUターンIターンの施策とか、長野といろいろ関わられるようなプログラムとかの運営に関わっている中で、まず前提としてというか感じるものがあって、今日その話とかもあると思うんですけど、やはり学生の人生の話と、地域にとっての軸との2軸があって、このUターンIターンをどうやって増やしていくかというのはすごく難しいことだなというのを5年ぐらいずっと感じています。その中でやはり今日もこの話でいろいろな立場の人がそれぞれの意見がある中でこれをあと長野市さんお願いしますとかだけだと、結構何も前に進まない可能性がすごくあるなと思うので、やはり何か新しいイベントをやってみようとかそのキャッチコピーをつくっていくだけではなくて、施策を考えていく方法みたいなものをもっともっと考えていかななくてはいけないのかなというのを大前提に思っています。その上で私個人として人口をどうして増やさなくちゃいけないのかという議論のなかでやはり公共の維持、住みやすい地域をどうやって維持していくのかというところが大きなテーマになってくると思っています。その上でやはり量だけではなくて、これからもっと質の議論をしていかななくてはいけないのかなということを感じています。例えば先ほどの話でも単に若者が帰って来るだけではなくてもっともっと縦の世代とも繋がっていくような若者が増えて欲しいとか、制度とかいろいろな改善もできることというのはたくさんあるのではないかと感じています。その上で、ちょっと3つだけ具体的な話をさせてもらえればと思っています。

1つ目が、情報発信の部分です。これその企業の情報という話があつていろいろな取り組みをされているんですけども、例えば学生の話や聞くと、結局どこの企業も働きやすいです、うちは福利厚生充実していますなど、結局どこも同じようなこと言っているみたいな話、どう選んだら良いかわからないみたいな話をすごく学生に困っていることとして聞いています。そうなるのと、やはりどんな学生とかをUターンしてきて欲しいのかと

か、例えばスマホとかの話もあったんですけども、実際、学生のツールみたいなものというのも変化してきているというよりは紙も別に読むし、スマホも使う人も増えてきているみたいなそういった層が厚くなっているという感覚でありまして、その中で、どうやって情報を届けていくのか。それはやはりその施策だけでなく、例えば、「カムバック to ながの」と言われて学生が戻ってくるかということ、もちろん、親とかにいろいろ影響があると思うんですけども、そういうメッセージとかが、Nターンとか ながのにご縁を とかいろいろある中でしっかりとその整理して誰にどう届けて、逆にその情報発信のツールも高校や大学との連携とか、もっともっといろいろなメディアだけではないホームページ作るだけではない、もっと確実な手段があると思うので、そこら辺をしっかりと議論していくことが重要なのかなと思っています。

2点目は、どうしてもその外から引っ張ってくることにいきがちなんですけども、新卒3年以内の離職とか離地域、地域を離れていく人たちをどう食い止めるかということが私個人としてすごく大事かなと思っています。そういう面で見えてきても、やはりその採用の面において企業さんも単にその来てねだけではなくて、実際はそれで働きやすい企業を増やしていくことが、長期的に見ても長野に戻ってきてくれる人を増やしていくような流れにもなってくるかなと思っています。

3点目はまだ施策としても長野市も一部取り組まれているところもあると思うんですけども、関係人口というふうに今総務省で言われていまして、デュアラーとか、ワーケーションとかいろいろな言葉で言われていると思うんですけども、もちろんその人口を単に増やしていくだけではなくて、例えば、その公共を維持していく住みやすいまちをつくるために、もしかしたら今後それで5Gとかいろいろな社会の変化が起きていく中で住まなくてもこの地域にしっかりと関わったりですとか、もしくはこう未来を一緒に考えていくことはできる可能性というのがもっともっと増えていくと思いますので、ちょっと例えばやはり外で活躍したいけれども長野に関わりたいたとかそういう人たちというのをしっかりと巻き込んでいくような仕組みというのをつくっていく必要があるかなということを感じました。

(梅干野委員)

私も何ていいますか宿題というか、それを課された時に思ったのは、最初の委員さんと同じようになかなか特効薬はないんだろうなという気がいたしました。特にこの資料の一番最後についている、人口流入促進策に関わる事業一覧を見てみても、これだけの事業をたくさんやられている中でなかなか効果が目に見えてこないというのはおそらくこの先もこの事業をたくさん増やしていてもあまり意味がないんだろうなという印象を持っております。

総合計画の審議会ですので議論がおそらく総合的になっていって、そこで議論される個別の事業なんかもこういった一覧に現れてくるようないろいろな事業がこう出てきて、な

かなかこう1本筋の通った骨のある方向性に向かっていけないというのはあるんでしょうけれども、やはり問題はそこにあるのではないかなという気もするんですよ。やはりこの第五次総合計画を見ていると非常に総論的でどこでもあるような内容でというのが正直な感想です。では一体ここに長野市らしさってどこにあるんだろうかというのを振り返って見てみると、良くわからないなというところで、結局人が長野市から出たり入ったりするその決め手というのはいかにその長野市に魅力があるかないかというのを見て判断するんだと思うんですけども、この総合計画自体に長野市らしさが現れていなければ、長野市を選ぶかどうかという判断にも繋がっていかないという気がするんですね。

先ほど、今後この人口をどうするかというような計画とこの総合計画を将来的に合体させていくというような話がありましたけれども、そこで非現実的な提案になるわけなんですけれども、ちょっとこの総合計画のあり方というのを見直してみても良いんじゃないかという気がいたします。総合計画自体が総論的な話になるのは当然それも構わない話であって、それに加えてやはり長野市らしい特徴的な政策を1つ、2つ、3つぐらい絞り込んで、それをここで表現をして具体的に長野市ってこういうところなんだよ、こんなに魅力的なところなんだよというのをしっかりと発信していく必要性というのが将来的にあるんだろうなと思っています。その発信の仕方、特に人口を増やしていく、外に出て行くのを止めるというような観点から言うと、やはり長野市らしい暮らしってどういうものなのかというのをちゃんとこういうところにイメージとして謳ってあげて、それができるサポートを手厚くしていくということが必要なんだろうなと思っています。

私も信州大学におりまして、毎年、特に私の学科に関わる話なんですけれども、県外からの入学者が8割、9割です。結局長野県に止まってくれるのも、その1割、2割というところで、結局外から来てもほとんどがまた出ていってしまうというのが現状で全然、長野市さんに貢献できてないなという反省もあるわけなんですけれども、幾らか残ってくれる子たちの理由を聞いてみますと、やはり長野市ってすごく魅力的な生活ができるんですと言うんですね。特に私、建築の学科におりますので、歴史的な建造物があるとか風景が美しいとか伝統的な営みが残っていると、学生たちもそこに暮らしてそういうものを見ていると、それを使いながら豊かな暮らしのイメージというのができていって、その結果としてそこに定着してくれるということが起こって、こういったことというのはもっともっと下の世代の子たちにも学んでもらいたいことですし、広くまだ長野に、長野にあまり縁のない人達も学んでもらいたいし、こういう政策の中でもきちんと打ち立てていく必要があるんだろうなというふうに思っております。

(牧野委員)

私もこれ最初に見たときに専門的な知見というものは全然なくて、何ていうか私はこちらに移住してきた人間なので移住者として感じたことをちょっとお話ししようかなというふうに思いました。

まず、やはり長野のイメージは緑も豊かで便利で、田舎暮らしもできるけれどやはり町もすぐそばにあって、とても便利というところがあって、すごく今私は住みやすいと感じていて、満足しているんですけども、今のお家を見つけるまでにもうすごく苦労がありまして、やはり空き家はたくさんあるのにそこを借りられる方法がわからないというか、空き家バンクを見ても載っていないということとかもあるので、その空き家は空き家がどれくらいあってというのも整理みたいなものもきちんとしていただきたいなというのもありますし、空き家があってもやはり貸してくれない方もたくさんいらっしゃるというのもあって、ちょっと大変だったので、私の場合はやはり3年間地域おこし協力隊としてこちらに来たので、その繋がりですべての3年間の間に人間関係とか、その繋がりを構築していたためにこういうふうなこと、こういう場所でこういうところを探してみたいな話をすれば、ほかの周りの方が手助けをしてくれていろいろ情報を集めてきてくださったんです。なのでそういうのがなくても、無事にお家が見つかって、今はそのお家に住んでいるんですけど、この前、新卒で長野市役所さんに入った女の子に本当は田舎で暮らしたかったと言ってたんですけど、でも、どこ見て調べていいかわからなかったという話をしていて、結局、その町中のちょっと高いアパートとかに住んでいるという話だったんですけど、せっかく県外からこちらに働きに来て、やはり暮らしたい、そういうふうに田舎暮らしをしてみたいって方もいらっしゃると思うので、そういう外からのアプローチがあった時にすぐにこういうところがあるよという、出せる家みたいなものをきちんと整理していってくれたら嬉しいなというのがありました。

あとは田舎で暮らしてみても思ったことなんですけれど、やはり田舎ちょっと閉鎖的なところは間違いなくあるので、そこにいきなり入ってくるというのはやはり難しいなというふうに感じていて、なのでその地域おこし協力隊もいい制度だったんですけど、この3年間の間に人間関係を構築できるので、その田舎に馴染めるというのがあります。でも、急に来た人がそこに馴染めるかというのをすぐにはやはり判断ができませんし、時間も掛かることだと思うので、体験的にもうちょっと住めるようなショートステイができるようなことがあってもいいのかなというふうに思いました。人との繋がりがすごく大事なので、繋がりがないと場所って作りにくいというのはすごくこの3～4年の間に思いました。

私がやはり住み続けている理由はその3年間でいろいろ構築した繋がりがあって、地域おこし協力隊が終わった後もいろいろ頼りにしてくれたりとか、いろいろなイベントに巻き込んでくれたりとか、やはりそういうのがあるから自分1人でここに居ても孤立がなくて楽しく暮らせているというのがあるので、人との繋がりがあからやはり住み続けられるなというふうに思いましたね。

あと、いろいろお話を聞いていて同じ意見だなと思ったのが廣田さんで長野にいる小さいうちに地域と関わるというその関係づくりになると思うんですけど、やはり子どものうちに自分の住んでいる町がどういう町なのかということを知ることとか、それでこういう町だから、こういうところが好きだなというふうに思って、思うことって多分、その外に

出てからも、ああいうところがやはり自分の町良かったなというふうにこう外と比べてみたりもできますし、戻ってくる1つの要因になるかなというふうに思いました。

ちょっと別の仕事でNPOをやっていたんですけど、まちづくりを子どもたち小学校5年生ぐらいの子どもたちとまちづくりを考えるというのをやっていたんですけど、やはりそういう経験があると、将来自分がどういうふうな町にしていきたいとかこういう町に住みたいというのを、子供のうちから考えるというのはすごく大事ではないかなというふうに思います。

それから、個人的な話になるというか、込み入った話になるかもしれないんですけど、私のパートナーが外国人で、この先どうするかという話をしているんですけど、ビザの問題とかもいろいろあって、彼が日本企業で働くというのも別にいいんですが、日本企業で働きたくないと言うんです。なんかその多分、イメージがすごく忙しいとか休みがないとか、みんな本当にぎりぎり頑張っているイメージがあって、外国の人たちも過労死という言葉を知っているぐらいで、私が結構休みなく働いていたりすると、もうすごい心配してくれるんですけど、そういう働き方をやはり日本の働き方はあんまり好きじゃない。彼の国では結構フィーカというお茶をする時間とかも仕事の時間の中にもあって、農業の人たちとお茶するのと似てるなというふうに言っていたんですけど、10時と3時とかにおやつ時間みたいなものがあったりとかして結構ゆっくりできる。あとはその子どもを迎えに行ったりするのもそれで抜けるとかも可能だったりとか、あとは休みが全然日本は取れないけれど、スウェーデンからしたら休みは3週間ないと休みとは言わないみたいなことを言っていたのでやはり働き方なんか日本企業じゃなくてスウェーデンの企業があったら日本に来てても良いというふうに彼は言っていて、その働き方が違うからなんていう話をしていたりとか、あとは子どもができた時にどっちで育てたいかという話をした時にやはりスウェーデンの方が福利厚生とかお金の面もそうですし、あとは教育の仕方とか、向こうの幼稚園とかも見に行ったりしてたんですけどやっぱり違って、何か2人で話した時にそっちの方がいいんじゃないとか、あとは日本にいと日本語でしか話せなくなるかもしれないけれど、向こうにいと自然と4ヶ国語、5ヶ国語普通に喋るようになるので、国際的にいろいろな場所で仕事をするのにもいいんじゃないとか、そういう話をしたりしました。ちょっと個人的な話になってしまったんですけど、そういう意見が出たのでちょっとシェアしようかなと思ってお話ししました。

(宮沢委員)

私も専門的なことと言ったら、農業とあとは子供が5人おりますので、どちらかという母親目線というかでお話させていただきたいなと思っているんですが、大体周りの東京の友達だと子どもは1人、多くて2人という形なんですけれども、私の住んでいる若穂地区は2人から3人で1人だとちょっと少ないねというぐらいの感じなんですよね。何でかなというところだと、やはり周りにサポートしてくれる体制が整っているということです。

やはり子育ては1人でやるものではなくて、社会全体というのが内閣府とかいろいろところでそういうふうに謳ってはいるんですけども、実際のところはワンオペになっている現状が多くて、そこをまず長野が第一歩としてワンオペにならない。

一番は社会というか地域の方も巻き込むというのが一番いいとは思いますが、一番は夫というかイクメンと言っている段階ではちょっともう終わっているなと思っていて、イクメンっていうのは完全に手伝う体制、それだとこれからの感覚だと子どもを産みたいなって果たして女性側が思うかどうか。結局、それで産んだ後に産んだのは結局、産んだ人の責任だろうというふうになるのであれば初めから産まないという選択をする人が増えるというのは当然のことだろうなと思ってます。なので、今までの歴史的な流れとかでいきなりそういうことも難しいとは思いますが、今この総合計画ですか、2060年までに人口が30万人を切らないよという計画だとすると、40年ぐらい時間があるということなので、その間に子供の教育のところからやり直せばそれまでには持ちこたえられるのではないかなと個人的には感じました。

具体的には、今の親世代が母親に押し付けなくて、地域の人も協力的に見守るという体制をちゃんと市の方で、例えば広報ですとかいろいろところでアピールするというのが1つと、あとは性教育をもう1回やり直すというところですね。今、小中高の学習指導要領だと性交という言葉も使ってはいけないことになっていますので、性交を言わないで子育てどうするんだという話なので、それは国ではできないことになっているので、それはもう市の方で、例えば課外授業のようなところで1回徹底してやっていくというスタンスをとって、男性と女性の性差というところをちゃんとお互いが認識するような尊重し合えるような人格というか子どもたちが育っていけば、長野市で育った子どもたちは子育てを前向きにとらえたりとかできるのではないかなということと、あと先ほど何名かおっしゃっていたんですけど、やはり自分がどう育ちたいかとか生活したいかということイメージする、小さい頃からイメージすることが大事だと思っていて、実際に子どもを産むとか産まないとかそういう選択のことを考えるのは割と自分の適齢期が迫ってきてからとか20歳過ぎるとか30歳目前とかそのあたりで、やはり産んだ方が良かったのかなとか考えると思うんですけど、そうではなくて、もう小学生とか中学生とか、もうすぐ精通とか始まる前にみんなが1回考えるという機会で、自分は将来子どもを持ちたいのかとかそういったところから考える教育をしていった方がいいのかなと思ってます。

個人ではそこまで単発的にしかできないかもしれないですけどせっかくこの長野市という大きな括りでお話させていただいているのでせっかくだったら、その教育のところでも長期的に企画に入れていただけたらなと思いました。

(市村副会長)

青柳委員さんはじめ他の方からも出ましたけれど、事業一覧ということで、たくさんの方の取り組みをなさっていることはすごくわかりましたし、本当にすぐに結果という大変だ

と思いますけど、継続していただければと思いました。

また、私の今所属しているところでは観光誘客ということで、国内外はじめインバウンド、外国人の方に来ていただくということで、取り組んでいるわけですが、外国人の取組で言いますと、今スノーモンキーということで、たくさんの外国人の方が来ているのを皆さん見ていらっしゃると思いますけれど、その日帰りツアーはじめ、長野市内に泊まっていたり市内を散策していただくとかいうことで、長野市のみならず周辺の市町村、あと県内とか、また他県も含めまして、多くの方に来ていただきたいということで取り組んでおります。これはコンベンションビューローが単独でやっているのではなく、観光関連している事業者さんと連携してホームページに挙げていただいたりとかして取り組んでいるところがございます。国によってはいろいろなコンテンツが違いますので、それは国に合ったものということで取り組んで見直しをしつつやっております。

先ほど熊井委員さんからも出ましたけれども、長野市は交通なハブとしていろいろなところに行けますので、それを言いましたように長野市から日帰りでも行けますし、市内、県外いろいろなところに行けますので、それが継続してやっていけたらなと思っております。それでまた先ほど宮沢さんをはじめ、牧野さんとか、廣田さんから地域の子どもたちとか、関わりということでお話し出しましたけれど、私個人的に子供劇場というところに入っているんです。何でこのおばさんがという感じがしますけれども、ばあば役ということで小さな子どもを働きに出ていて面倒が見れないという時にはちょっと時間があつたら見てあげますよということで、そんな取り組みもしていますので、おっしゃったように本当この地を好きになっていただいて、あのときこんなことやってもらったなんていうふうになっていただければいいかなと思っております。

(金物会長)

私は初めに自己紹介しましたがけれど、もともと長野の人間でなくて、長野に住んで35年経ちますけれども、長野市は魅力がある町なんです。結構全国的に人気があつて、私は個人的に小中学校のときから何となく長野に憧れていました。たまたまこの職を得たのがあつて、長野への移住になつて今こういう立場でお話しますがけれど、実際に例えば学会とかいろいろなところで初めて会う人に対してどこですかという話から始まるんですけども、私長野に住んでいますよと長野はいいですねって皆言うんですよ。先ほども牧野さんがおっしゃったように、緑は綺麗だし、空気は澄んでいるし山も近いし、何ていうか環境はいいということで、一応そういう意味の人が憧れるとしては間違いなくあるんですけども、結局そこで問題になってくるのはやはり意見が出てますけれども、やはり自分の人生を託すのに相応しい仕事があるかどうかという問題がまず一番大きな問題なんではないかなと思いますけれども。

あと企業誘致はもちろんですけれども、あとはやはり長野というのはやはり観光が盛んになるべきですし、今の善光寺、それから戸隠、それから松代、鬼無里そのほか含めてい

ろいろ長野市の中には人が住める場所がありますけれども、長野市の中でもいろいろとこの観光に関しては、調査をなさっていて課題もいろいろ現状把握をやっておられるんですけども、これは一生懸命やっていただいて、先ほどから意見いろいろ出されていますけれども、これが絶対良いとか特効薬があるわけではないんですけど、やはり地道にやっていくしかないんじゃないかなってところは、私は思ってます。

皆さん各委員のお話を聞いて、何か追加なり、またこの委員さんにこの件についてはどうですかという、お互いに何か質問がありましたらお願いします。

(梅干野委員)

人を増やしていくという話の時に、やはり東京に人が出て行ってしまうというような背景がある中で何か市町村レベルで対策を講じていくということに限界があるのではないかなという気がしています。一方で、何か県のスケールで考えるのもなかなか難しいだろうという気がしております。先ほど熊井委員さんの話もありましたけれども、長野市とその周りのある程度文化圏みたいなところの中でいかにこういう問題に取り組んでいけるのか、もちろん人を増やしていくということもそうですし、仕事を増やしていくということもそうですし、観光のこともそうですし、そういったことを考える市町村横断の場みたいなものというものが現状あったりするのでしょうか。

(西島企画政策部長)

市町村単独でやるのではなくて、長野市の場合ですと9市町村で大きい長野地域というのをエリアにしています。もう少し北に行くと飯山市の方はまた北信地域というちょっとブロックが違うんですが、長野地域、北信地域を一緒にしたようなものをなるべくやろうと。観光はもともとそういう発想で広域的なものをやっていますが、いろいろな市民が利用する、例えば図書館ですとか、保育園とかいろんなサービスもその長野市に住んでいなければ使えないということではなくて、周辺の住民もその市町村の境目を意識しないで使えるようにというのがスタートしています。これからは、そういう生活に必要なものの垣根は取り払ったんですけども、次に課題になるのは今の就職をしたり、企業を誘致をしてきたりというのが今まではどうしても長野市と須坂市は競争相手だと、どちらに企業が来るか、この人がどちらに住むかで市町村で先ほど税収の話も出ましたけれども、そこに直結するので、そのあたりのところをこれから一緒にどういうふうにやっていくかというのが今課題というふうに考えております。

(梅干野委員)

具体的にそれはいつぐらいに発足して、今どういう名前の組織になっているんですか。アンオフィシャルなものなんですか。

(西島企画政策部長)

オフィシャルなものです。長野広域連合というのは地方自治法に位置付けられた組織です。これはもう平成の初めの頃からできていまして、例えば一番生活に密着しているのは私たちのごみの収集で、ごみを焼却するときに市町村ごとに昔は処理場を作っていたんですが、24 時間燃やすためには、たくさんの量を 1ヶ所に集めるということで共同事業をやる組織がベースにはあります。そのほか、地元の企業を大学生に知らせるためのおしごとながのというネットサイトを作りましたけれども、それは長野市がつくったんですが、最初は長野市内の企業だけを載せていましたが、今もっと広く周辺市町村の企業情報も一緒に載せると、学生は長野市だけではなくて、広くこのエリアにというふうに個々の事業も基本的にはすべて周りを意識して連携しようという形になっています。

(金物会長)

それでは本日、委員の皆さんから建設的な意見を多数出していただきましたので、それを元に総合計画や総合戦略の参考としてもらうよう、よろしくお願ひします。

それでは全般を通して何かございますか。

よろしければ以上で議事を終了させていただき事務局へお返ししますので、よろしくお願ひします。

4 その他

(事務局)

熱心なご議論ありがとうございました。

それでは次第の 4 その他について、事務局から説明をさせていただきますのでお願ひします。

(事務局)

企画政策部企画課長の日台です。よろしくお願ひいたします。

私からその他としまして、前回の 11 月の審議会にて青柳委員からご質問いただいた件について回答させていただきます。

— 資料「総合計画前期基本計画の進捗状況（抜粋）」に基づき説明 —

以上でございます。

(青柳委員)

どうもありがとうございました。ご苦勞お掛けしました。

(事務局)

最後に事務局の方から次回の日程についてご案内を申し上げます。次回でございますが、年度改めまして、ゴールデンウィークの前後ということで、ただいま調整中でございます。日程が固まり次第近日中にご案内をさせていただきます。

5 閉会

それでは以上をもちまして、平成 30 年度第 4 回長野市総合計画審議会を閉会いたします。ありがとうございました。